

季寄
註解

改正月令博物考

三春部

四

058
俳諧資料カード

年代

文正元年

編者

(筆者)

書名

改正月令博物考

備考

三春部
⑫

(下垣内蔵)

京市阿曾北五丁目三番八号
 下河内大入
 757



春部目録

△印ハ春三月
 △春の部の目録

○春は天氣の占候。養生の法等十九丁。

△春風 △東風 △春雲 △春風 △春雲 △春風 △春雲

△暉日 △糸遊 △春月 △暎月

△春夜 △春朝 △春夕

△春與 △春望 △春山

△春野 △春郊 △春海

△春川 △春雨

△霞 △霞 △霞 △霞

△長閑 △水ぬき

△春の雜 此部ハ春三月の事也

△佐保姫 △木地爐縁

△東宮 △霞洞

△雙調 △春の部

△の草木 春の部之目録也

△柳 春 北下 △芹 春 北下

△薺菜 春 北下 △家 春 北下

△嫁菜 春 北下 △椿 春 北下

△菠薐菜 春 北下 △穀精草 春 北下

△秦叔皮 春 北下 △雜菜摘 春 北下

△山葵 春 北下 △獨活 春 北下

△三葉芹 春 北下 △褒美の花の匂 春 北下

△海苔類 春 北下 △鹿角草 春 北下

△石蓴 春 北下 △種植 春 北下

春の生類 春の部 春 北下 △此 春 北下

△鷺 春 北下 △鳥の囀 春 北下

△百千鳥 春 北下 △目刺 春 北下

△鷺 春 北下 △駒鳥 春 北下

△雲雀 春 北下 △鱒 春 北下

春 一目録終

春之部

△此印ありの春 三月より季入

春時令

此部より春三月ふじなる季の物をのす

春風

東風の春吹風いのどろみしをまつるるのさう

春風の地下より吹上り地中の生理を起し 野青く是春の應あり○

巳卯ノ風あり其年大風あり 五月西春の南ふ秋の北の風も

東風の雨つるとさきとよめり 哥の俗説とよめり

あり春の木さり南の火たり南風の時節の氣より相生とよ

方の風は雨とよめり方角より時節の氣と生とよめり晴北の水春

北風より水生木と生とよめり 北風より晴より西北の風と

乾風といふ四季より晴より東北の風は常より雨にたりとよ

とも春の北風こそ晴多くと以て
東北とくとも雨よ多くび申西の
風とよどむとの常は晴とほつと
どふといふと春の南風こそ雨
とあるゆへ未申にさも羊頭と
して雨よなるあり

哥拾遺

躬恒

吹風とよふいふらん梅乃花
うらうらうの村そ香いまよりけり

同 春風不分処 後京極

おしあきてはの春をもしあき
君がはげたよのまうせそく

詞胡風。あるら。まごり。

非春風や二條の松を清くさる 鬼貫

詩 春風 五字對句

煙花宜落日 春風開紫閣

絲管醉春風 大樂下朱樓

詩 春風七字對句

詩礎

只言啼鳥堪求侶 揺春風

無那春風欲送行 野外昏

春風夜動蘿衣薄 度春風

芳樹朝催玉管新 逐春風

霽日滿江寒漏靜 動陽春

春風遠閣白蘋生 待落梅

寒雨送行千里外 任好風

東風沉醉百花前 舞東風

詩 春風 詞

高遠

明月斷魂清靄々 平蕪歸路

綠迢々 此二句春月 人生莫遣

頭如雪 縱得春風亦不消

頭ノ雪ノ如クナルヤウニチキ用心アリ

頭ノ雪ハ春風ニモキヘサルゾ

春雲

風ノ同ノ西風吹ノ

又降晴とあり事風の方角

同ト西南トあり東へ行と出雲

より晴より東北より西へ行と

入雲より雨なり或ひは東南

東北より雲と入ると雨西北

西南より雲と出ると晴西南

とより南へ下り未申の

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

より雲出ると沖氣といふて雨

春天

△春の空のひろさのどろ

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

おぼろけ霞をさく田子け浦か

詩 春天五字對句 同上

碧落三天外 山川乱雲日

黄圖四海中 樓閣入炬霄

雲断岳蓮臨 大路樂春天

天晴官柳暗 長春兼煙霞

山河香映春雲下 拂春雲

城闕參差晚 樹中入洞天

詩 春天七字對句

詩 春天七字對句

詩 春天七字對句

詩 春天七字對句

詩 春天七字對句

詩 春天七字對句

春 時令 春天春日

春 三

春日

北山殿

為世

日新の今物もかたぬづりけり

忠房

かゝる夜もあつちあつちとほしきより
日のくしくくもあふけらるる

詞 めづる。出る。天はくみ新。日新
照とめづるのけしき。あふけらるる。

くろく。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

連 千のさしと。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

俳 ひろく。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

狂 見ゆれば。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

候 連。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

△ 秘 暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

△ 春の日は。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

新古今

我がまの山はあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

六百番哥合

有家

夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

万葉集

うつくしくあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詞 夕暮。あふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

俳 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

狂 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

詩 夕暮のあふけらるる。あふけらるる。あふけらるる。

春時令 糸遊 春月

春ノ四

桂林山中佳日長

迎春遲

春風自信牙搯動

對斜暉

遲日徐看錦纜牽

日光遲

糸遊

遊糸 春の日のくみ時空とと
糸の乱れやうらやま

△陽冬 野馬の日のくみ埃の乱れ馬の走
るがに 莊子 野馬の塵埃ありとあり

哥 六百番

定家

春月

△臈月 春の月の
おぢうして艶ある物

新古今

大江千里

同 源具親

同 夫木 春山月 入道攝政

同 後九條内大臣

同 定家

同 家隆

同 有兼

同 為氏

同 宣房

同 霞隔月

同 夫木

同 夫木

同 夫木

同 夫木

同 夫木

同 夫木

同 夫木

春 時令 春月

春ノ五

いづるにあらぬ去れらの月

詞 處にふる。春のそこ。夜半

の月。移月夜。殘のち。のどろ。

あふらにゆるる。曇りやあふら。

比 春にあふら。んはくし。雪けの月。

かまみみの神。さのくまじ。たむじ

連 春にふる。もよおし。あふら。細巴

非 春にふる。もよおし。あふら。細巴

初 春にふる。もよおし。あふら。細巴

天の系。たの月。たの月。宗因

手の夜。乃月。い。たの月。三州

詩 春月七字對句 詩礎

何尹天明坐莫辭懷清霄

春城月出人皆醉月朦朧

明月斷魂清露々

照野梅

平蕪歸路綠迢々

影含烟

同上

詩 春月五字對句

苔澗春泉滿琴伴前庭月

羅軒夜月閑酒勸後苑春

南斗斜

夜偏知春氣暖虫声新透綠

窓紗

映門淮水綠留騎主人心門前

綠リニ風景ヨキニ

明月隨良椽春

朝夜々深

夜ニフカクミ

ツルトナナリ

春夜

續後撰 義大政大臣

天の系たの月たの月

手の夜乃月い

何尹天明坐莫辭懷清霄

春城月出人皆醉月朦朧

明月斷魂清露々

照野梅

風小月ぬつりも花の香とよぶ
詞 春の曙の光をい夜をさうり

心もたのむるにほひのほひに
俳 春のやけり人かきまを新をりし

狂 人月さそふりこも春のよ
おろろ月夜ふとくりよのほひ可由

春朝 新古今 藤原家隆
春の山木の松ふら乃

くく波ふらぬく撲雲けそら

詞 春の曙の光をい夜をさうり
の朝の光をい夜をさうり

俳 朝の向へ梅の香も来て咲けり
詩 春朝七字對句 詩礎

華堂翠幕春風至 曙北寒

繡閣金屏曙色開 送曉鶯

春浮玉藻寒初落 月沫収

露拂金莖曙欲分 入晨遊

春眠不覺曉 處々聞啼鳥 春ハ

多キユヘ夜ノ明ルヲ知ラス鳥ノ夜

来風雨聲花落知多少 夕雨風

春夕 春の夕ぐれといふや
暮春とスハ春の末ニ

百子名を声のどかして遠を乃
乃子

詞 夕ぐれを言ひたるを今もくは
夕霞。夕日如と光る。雲かきき

連 梅の香は分はれぬるを月夜 不知

狂 山寺のまはれ夕霞を夕ぐれハ入相
夕ぐれを言ひたるを今もくは

春夕七字對句 詩礎

春一時令 春夕春望

春七

緑水殘霞催席散

隔暮雲

畫樓初月待人歸

夕陽遲

小苑迴廊春寂々

散餘暉

浴鳥歸鷺晚微々

日覺閑

春興 春野山を遊びて興を

新古今 家隆

詞梅堂柳下。おまをさびび。おま

春望 春のあきき海川野山も

夫木 羅中眺望 有家

詞 ちるち。我まむかどむかどむか

青の山川。あのをれる。詠たるる。

詩 春望五字對句 同上

白雲田望合 城關千門晚

詩 春望七字對句 詩礎

白蘋楚水三湘晚 樹中分

芳草秦城二月初 春色明

近郭亂山橫 古渡景物滋

詩 曲江春望 唐 盧綸

野莊喬木帶新煙 接人烟

鳥不知 影 曲江八禁中ニアル江辺尤

春一時令 春山

春ノ八

ケリ 菖蒲モ葉サカヘテ夏チカク春
モ末ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロ

ニモナリ 更到無花最深處玉樓

金殿影參差 花チリハテ冬見ル
モノハ金銀ヲカザリ

西亭春望 西亭ハ西宮同也 王昌齡
宴ノ居ル宮殿

日長風暖柳青青 北雁歸飛入

管冥 春モ半スグルコロ雁ノヲガ
古サトニカヘラント雲井ニトフ

岳陽樓上聞吹笛 能使春心滿洞

庭 笛ノ音ヲキクニツケテ
故卿ヲ慕フ心イト切

春山 春ハ州木もさえて山の
あきおりの事あり

拾遺 忠岑

夫木 春山霞 家隆

依保娘の名にありわろ山をん
けさもかきみれ夜をみたり

山家 深山不知春 藤原公重

雪分て外山の谷はうらひと
よりの里は春やつぐらん

詞 春の山を。山の嶺をむ。遠山
うとむ。霧はあけ雲をまわりぬ谷

けうとひと。春の山を。やうはせ
よりの山。さあや山。うらひぬ

非 地つきのさる處のまればま
立

在 四方ふの底の夜うらひと
まのすうらうらうらうら

春山五字對句 同上

緑野明朝日 花雜重々樹

青山澹晚煙 雪輕處々山

詩 春山七字對句 詩礎

井轉轆轤千樹曉 滿春山

鎖開閭闔萬山春 隔暮雲

春一時令春野

春久

遠山積翠横海島コレイノハル五嶺春カタイナカ

殘霞飛舟映江濱ハナミツヤミニ花滿山ユフヒニアカリ

詩春山詞

劉商

君去春山誰共遊キミサラハユニサンタトモモカアハコトキハナクテ鳥啼花落水ウミノホトリ

空流君カヘラバ花鳥ノ風景モモノ如サカヒシ今送別臨溪水他日相サカヒシ

思來水頭今溪水ノアタリマテ別思來水頭ユ遊ユ來ユ後ユ日ユ此ユ流ユ水ユ

思來水頭ユ遊ユ來ユ後ユ日ユ此ユ流ユ水ユ

春野

哥万葉春のふ

我そ中夜をうつと一夜絲ふらり詞

らる。多ふと。ふけ日。つらふ。

とみま。日ま。み。群遊。芸。約。

糸た。さる。梅。柳。馬。はく。

非りつていれくま乃ま來山

春のさる梅の乃さるくす桶兼山

詩春野五字對句

同上

臺榭春光媚ヤチクチテイノキ野竹池亭氣チホシキクニキ

郊原遠樹平カウゲン春花澗谷香ヒロキノ

詩春野七字對句

詩壁

聽雞曉闕踈星白キクケイデキヤウツウ落芳塘オツハウトウニ

走馬春光細柳黃ハシラセテムニラ入平蕪イルヘイブニ

田夫就餉テンフ遠依草遠野外烟ヤグワイノケ

野雉驚飛ヤチオヒロヒテ不過林ニススキハヤシ春色深シユンシヨクフカシ

春 時令 春海 春ノ十

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

續古今 抄本人磨

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春郊 春の野乃事なり 隆信 六百番哥合

春川 川よ梅櫻の水ふうの

らりらうらうらる 体雪消て水ま

哥 夫木

公好

六田川客の柳のまられ棹

あけはの。穢みえゆる。とくお氷。物

俳川えしや。翠のつまへ。世仙鶴

詩 春川 七字對句

詩礎

樹色 到京 三百里

渡水 入

河流 歸漢 幾千年

逐水 平

湘潭 雲盡 暮山出

盡清 流

巴蜀 雪消 春水來

弄晴 川

春雨

春雨の音ふくまゆや

哥 建長百首

良教

新後撰 庭春雨 大政大臣

世は移る方のかくれ世のふるふ

夫木

旅春雨

知家

詞 物居くもの。志免れ。たやま

あけはの。穢みえゆる。とくお氷。物

系あり。笠かき。さきさき。あめぬ。ひらさ
のぬ。像。神。元。上。夕。雨。た。れ。く。あ。の

日。ぐ。じ。夜。雨。の。ぬ。夜。夜。圍。淋。し。

灯。の。光。り。も。志。多。る。軒。西。を。こ。さ。形

た。ま。あ。形。の。系。あ。形。の。景。木。の。下

霧。旅。旅。衣。志。ほ。り。や。ま。れ。を。志。あ。る。

ま。の。春。ぬ。橋。の。長。ぬ。意。侍。人。の。さ。い

つ。ま。ぬ。衣。こ。り。る。涙。を。志。あ。る。ぬ

運。ま。ぬ。山。さ。る。む。ほ。れ。山。宗。養

善。ぬ。お。は。の。ま。は。の。軒。ま。ぬ。紹。巴

非。春。の。ぬ。た。ま。た。の。花。持。山。宗。水

春。ぬ。や。の。ぬ。家。も。う。ん。桶。來。山

け。ぬ。た。た。ぬ。人。や。家。の。夏。其。角

ま。ぬ。や。の。は。い。ま。の。後。十。磨

狂。か。き。の。う。崩。き。の。春。た。ま。ぬ。

さ。び。し。ま。は。の。ぬ。舟。ら。う。く。走。帆

詩。春。雨。五。字。對。句。同。上

野。館。濃。花。發。海。暗。三。山。雨

春。帆。細。雨。來。花。明。五。嶺。春

霞。段。△春霞△初霞△一のす

み。あ。り。△霞。網。△霞。海。△霞。波

△八重霞 △霞袖 △霞衣

△鐘 △霞関 △霞洞 △霞海 △霞波

同 野径霞 全

春月ゆくかよみのね山風み
そのゆかりらざうそくれてぞ行

建保百首 海霞 全

かよひての波もてゆふのよやそれ
うそよふたけけすまの浦を

建曆哥合 山家霞 為家

谷の戸れくはの色のまきくふ
かしてかけやうのうら務

夫木 海辺霞 参議為相

くく日のうきれまきと波路を
かよみをよけて帰ふよひ

續古 朝霞 家隆

春の花乃おちらけ花はまごころ
出る朝日もなほうらむらん

夫木 河辺霞 成茂

水とやまの柳乃あつみどり
うらんのかげ乃あつみどり

建保哥合 野霞 順徳院

ひさゆやかれうまはきと秋の
まらぶそかよひちのしとま

遠きうの海火のこい。霞は霞や。楳

うぬの煙ももろぬ浦く霞は。関

けんとく。霞ふとま。霞とあめ

結人 森 森の枝もつね。風を霞

里の煙ももろぬ。里遠くかよむ。

我よし里は夕霞。河沿の春はひび

霞ふじ。河沿。河柳をこい。岩沿

うす。橋。霞をこい。霞は中た

ゆり。霞ふか。霞て遠き川沿

日。長閑にうす。霞をまら。ゆあ

とと。雨ぬ。うら。かよむ。うら

とと。雨ぬ。うら。かよむ。うら

とと。雨ぬ。うら。かよむ。うら

居所霞の窓。くまじ彩嫋。花のうく
 かまじ。霞む垣根。衣霞の衣。佐保
 娘の衣。うまの池。旅路のうす
 こけまらふ。古里はまらむ。初方
 うら都はむ。かろむ。日常。群辺は霞。
 山は霞。ゆりまの。戀もれぬ。ま
 ちる。ゆるゆる。春の枝。うまむ。ま
 わらう。とたひる。まらむ。とせ

○狂 九まを春の霞はあまの目ふ風
 なる。とやけの。とらあり。女風

○霞の作る霞と本朝の哥ふ
 詠とる霞といちごう。歌連俳み

詠して春の季ふ入ふ。蒙とふ
 そのみて霞と訓と春の比天

氣の帯るをいふ。又詩ふはく霞
 霞の朝霞晚霞のふ。本朝み

ていあさやけ夕やけの事みて
 今いふか。とこの事みていふ

今いふか。とこの事みていふ

雨霞

是本朝俗といふ朝やけ夕や

けの事。の日のてる。と東の方
 赤くてきへう。早く早くきへ

ハ雨ふるを。一面はあり。日
 二三日の内。雨ふるあり。日

の入りて。西赤く南へ。あり
 ハ晴あり。この事。委

く。本篇博物。笈といふ書
 物。のぶる。いふ。畧に

霜空澄曉氣 聖藻無寒露

霞景望芳春 仙杯落晚霞

詩霞七字對句

詩礎

雲開日月臨青瑣 卷曙霞

風卷烟霞上紫微 晚霞多

春 時令 長閑 水ぬる 春十七

遠山積翠横 海島趨紫霞

殘霞飛丹映 江湄向晚霞

長閑 暖温麗の春の日

天氣ほくよく和暖ふありく
その麗も同じ心めく百花
咲乱きてうかりきと云心とゆかり

玉葉 永福門院内侍

をらこの花乃か初りもやえ
ゆる霞のまぞのどけさ

詞 夕日 暮柳 遠人うら 眠胡蝶
霞 山の煙 雲のよけさ 松ありあ

草 春の目 花 夢 春の目 花 夢 春の目 花 夢

俳 時津風 船舫のどけさ 和国の系
や田の中をのる 舟は一有

水ぬる 春の氣をぬる

水ハ陰氣のりの冬ハあてま
りて氷とある春の陽氣と得
てゆるむりのま

俳 水ぬるむりのま 阿誰

詩 水暖五字對句 同上

春風増風色 川原通霽色

麗日發光華 田野徧春容

詩 水暖七字對句 詩礎

旌旗日暖龍蛇動 居住閑

宮殿風微燕雀高 雲過遲

芳郊綠園春晴散 趣轉閑

復道離宮烟霧生 玉生烟

春 雜 此部は春三月より
混雜の物とのす

佐保姫 春の造化の神也

天地の色とありさきとありふ

ふづちとあり袖下集に四季

の姫は歌あり佐保姫の言は

ひたひた代と寄るまきつるの

⑤ 春の雨の風夕まき佐保姫

のまき夜まきひまの神長

花咲山のごうごうのうまえうへ

⑥ 佐保姫の家作とせ彦宗俊

狂ま姫の産る夜めひうま

けさゆまうまのまひみ 走帆

木地爐縁 数寄屋の

冬の炉の塗をらと用の春の木地を

用や春の自然とやうなよつと

塗まのうまうまの東宮

⑦ どうぞうとて春の東と主

宮ぞうゆま季なりいまご御即位

まき親王の御事と申と也

霞の洞 天子の御位と

春の造化の神也

天地の色とありさきとありふ

ふづちとあり袖下集に四季

の姫は歌あり佐保姫の言は

ひたひた代と寄るまきつるの

⑤ 春の雨の風夕まき佐保姫

のまき夜まきひまの神長

花咲山のごうごうのうまえうへ

⑥ 佐保姫の家作とせ彦宗俊

狂ま姫の産る夜めひうま

けさゆまうまのまひみ 走帆

木地爐縁 数寄屋の

冬の炉の塗をらと用の春の木地を

用や春の自然とやうなよつと

塗まのうまうまの東宮

⑦ どうぞうとて春の東と主

宮ぞうゆま季なりいまご御即位

まき親王の御事と申と也

霞の洞 天子の御位と

春の造化の神也

天地の色とありさきとありふ

ふづちとあり袖下集に四季

の姫は歌あり佐保姫の言は

ひたひた代と寄るまきつるの

⑤ 春の雨の風夕まき佐保姫

のまき夜まきひまの神長

花咲山のごうごうのうまえうへ

⑥ 佐保姫の家作とせ彦宗俊

狂ま姫の産る夜めひうま

けさゆまうまのまひみ 走帆

木地爐縁 数寄屋の

冬の炉の塗をらと用の春の木地を

用や春の自然とやうなよつと

塗まのうまうまの東宮

⑦ どうぞうとて春の東と主

宮ぞうゆま季なりいまご御即位

まき親王の御事と申と也

霞の洞 天子の御位と

春養生

素問曰く春三月これに發

陳くして天地共小生一萬物以て榮ふ夜は早く臥し早く

起る庭にひろを歩し形とゆるやくして志を生ぜし免よ

生じて殺すことなれ賞して罰とらざる是養生の道也

春天氣

春の初甲子晴き天氣はしては雨ふれ

春中雨多し此日なりの事おもはらず春の物のころせふれ年中

の風雨もなれ准る事多し殊小甲子の干支の始まる此日の晴雨

も多しつるもの春の南風雨之きて春の雨の歌も詠如くおもく

降續くもの晴人を四方は山の根雲もなれ立登る此時風の東小替る

又北吹上りて日細ふれは暗ると云共寒くして四五日の内も雨あり

春草木

此の春の草木はは花如北あるし正月の季は用ゆるもの

柳

△楊 まがさき △志 まがさき △柳 糸の柳 △川柳 枝の柳 △水 水辺の生

川

△川をへ柳 柳 △青柳 青柳 △青柳 青柳

異名

△金絲 金糸 △白線 白線 △点花 点花 △弱州 弱州 △樹 樹 △聖門 聖門 △柳 柳

玉柳

△玉柳 玉柳 △風見草 風見草 △風無柳 風無柳

根水草

△根水草 根水草 △柳 柳 △柳 柳

柳の髪

△柳の髪 柳の髪 △柳の眉 柳の眉

万葉

△柳の眉 美女のまゆ

△春すくき 春すくき

堀川百首

△柳の眉 美女のまゆ

△春すくき 春すくき

丈治百首

定家

遠くをたみくうれをふたりのきり
まふはかしの庭乃 ありや
夫木 岸柳 伊勢大輔
ま柳のいそがねふひくあひい
さうしゆくいそがねまわいけ

夫木 杜柳

匡房卿

ちくとしてんをりしそふさう
つてより かなるま柳のゆり

建長十首

河柳

光俊

せげやまかたさきしん玉川の
いそがね柳 えごそふがね

建長百首

水柳柳

仲正

里をたはの河をたふさき
やづへまらうかつらまら

夫木 水辺柳

家隆

ま田川 せげやまかたさきしん玉川の
色そふさういそがね乃 青柳

同 閑居柳

兼宗卿

我宿のいそがね柳うちまびく
くまら系いそがね人びく

詞

まびく。おそてよりうら。野
野野系柳。まら。路まよりて

河の柳。いそがねにいそがね。
ぬまてやと。柳のまらまら底

まらてまらまら。まら。まら。まら。
まらてまら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。

まぬぬのふりててゆくふりハ
あつめつまんやせ川のせり

詞 春日野。香濱の沢。法。法。小。野
内。塩。素。昔。の。く。月。無。ぬ。る。も。椿。芥

小芥。法。根。芥。恙。せ。り。沢。の。芥。沢。の
常。法。の。芥。根。の。男。少。法。や。と。み。菜

非。せ。り。つ。む。と。け。せ。酒。を。さ。う。か。且。葉
抽。り。く。く。の。ふ。ひ。ま。ど。る。根。芥。が。亀。音

浮。の。葉。芥。梳。る。あ。り。れ。か。其。角
ふ。守。ひ。や。線。小。唱。る。芥。の。花。同

女。菜。芥。の。事。なり。一。説。よ。ハ
せ。り。の。外。小。別。ふ。名。ぐ。と

つ。る。の。あ。る。く。い。説。あ。れ。も
七。日。の。若。菜。七。種。十。二。種。も。せ

ア。ハ。ゆ。れ。も。名。ぐ。の。名。目。か
是。と。以。て。さ。時。い。せ。れ。異。名。あり。か。り

◎。夫。未。結。の。女。り。あ。く。れ。さ。あ。い。と。人。虫
と。も。あ。る。回。の。原。畔。つ。い。は。け。日。芥

◎。川。の。女。り。山。回。の。あ。く。れ。さ。あ。い。と。人。虫
考。神。を。ぬ。り。は。さ。り。那

薺。菜。冬。到。後。莖。生。ど。二。三。月
莖。と。も。らん。護。生。叶。も。云

薺。蒿。順。和。名。曰。あ。づ。ま。の。和。名
あ。づ。ま。ご。と。あり。◎。夫。木

く。ハ。い。ま。で。あ。ろ。の。か。ん。た。つ。野。を
形。ぐ。の。あ。ま。菜。の。ね。や。ま。り。ん

嫁。菜。薺。蒿。の。と。く。ろ。◎。非。ね
の。内。部。を。あ。ら。ん。や。あ。ら。り

◎。正。貞。右。あ。づ。ま。を。と。れ。た。あ。ら。り
え。と。色。々。説。あ。り。三。品。も。同。物。あ。り

嫁。菜。雞。見。腸。も。云。◎。非。好。も。と。そ
い。れ。あ。り。あ。ら。り。◎。整。露

椿。玉。椿。◎。白。玉。椿。◎。唐
海。石。榴。△。列。々。椿。△。伊。勢。椿。△

二。階。椿。等。別。種。あり。數。百。種。あり
○。山。茶。海。石。榴。櫻。椿。これ。木

皆。い。て。い。て。訓。と。尚。説。多。く
後。編。の。り。り。と

波。菘。菜。◎。波。菘。◎。正。月。植。物。春。喰

穀精草

ノ月田の中ハ生ズ葉石

昔の草々花小き丸じて白く光
あつて星のおく一木を秋とん

秦椒の皮。△山椒皮ともいふ

雑菜摘 雑菜とむらうの季は
摘春入 諧の菜のこ

山葵 山中の水らうの取は生ど人
家伝傳二月末三月苗生

獨活 風をさふ獨活ゆふ名づく

○一説より二月の季とともいふ

三葉芥 △三葉ともいふ。正月
末より二月苗生と擧

喰ふ。一説より正月ふとる説もあり
又二月ふとる説もあり可考

麩衣美の花乃句 かねたる
詠葉え

苔脯 △海苔ともいふ。海のもの
ろく種類あり次ハ記を

青苔 菟苔ともいふ。味辛くも一伊勢

△神化苔 △あぬのりともいふ。色紫あせ
石の上より生どるりのなり

△於期苔 海中石の上より生と其うこち

△浅草苔 △浅草のり △紀州津

△櫻苔 色は黄白櫻の意。ちくちくあつとる

△松苔 大なり松花を食 △十六嶋苔 雲州より
多く出る

非の水や何ふとすの苔の味其角

狂武彦より流まき各のこまり

はあろぼしの流川のりの信海

鹿角草 鹿尾草。六味菜といふ

如く色より伊勢物語 業平朝臣

〔異名〕 尙夷 鶯黃 焚雀 博黍

黃鳥 容鳥 谷鳥 黃公 百喜

黃鸝 黃飛 倉庚 花見鳥 句鳥

とく鳥 經う鳥 歌う鳥 喜う

〔傳〕 昔は明なつらり枝のふ 紹巴

〔非〕 昔は方とらふ 宗和 其角

〔鶯〕 のさのハ行中ら 鬼貫

〔鶯〕 の初まや ぼら 移竹

〔鶯〕 のいふまや 梅のさつ 来山

〔鶯〕 藏玉 花見鳥の證哥

〔鶯〕 山里のさきえすてよ 白ひさう

梅のさきえすてよ 花見鳥

文治百首 定家

〔鶯〕 の宿め 神さくれ 弁母

まきさう されぬらう 白く

家集 初聞鶯 定家

あつ玉の年れ 初鶯 ありぶき

初鶯のさきえすてよ 白ひさう

弘長百首 竹鶯 為氏

り 志ののみうれの弁 志の

あつ玉のさきえすてよ 白ひさう

嘉保哥合 旅宿曉鶯

明れとてしをたえ 田のさきえす

〔鶯〕 のさきえすてよ 白ひさう

建仁哥合 関路鶯 家隆

雪のさきえすてよ 白ひさう

あけふのさきえすてよ 白ひさう

夫木 雪中鶯 小宰相

おのさきえすてよ 白ひさう

さけふのさきえすてよ 白ひさう

同 故卿鶯 行能

〔鶯〕 のさきえすてよ 白ひさう

あけふのさきえすてよ 白ひさう

夫木 寒野鶯 家隆

あけふのさきえすてよ 白ひさう

夫木 松上鶯 小大進

あけふのさきえすてよ 白ひさう

あけふのさきえすてよ 白ひさう

あけふのさきえすてよ 白ひさう

室治百首

朝鶯

為家

のめまど絲ぐうの竹たのやん
かからよせてやうかすたなく

金葉

山家鶯

攝政左大臣

山家いとうきよの中とまきまきひそ
谷乃鶯絲をのこをそわく

夫木

田家鶯

俊成

まほしくが杖のそ絲を松く死ま
ほごまふりきさうの吉くろ

同

浦鶯

家隆

鶯のまろふさるけが歌波りこ
うしつらさとも笑やけいさる

詞

歌

本

つ

ふ

う

ら

ま

あ

る

雪言の本はらふ鶯の中に善瓜
まがりてあく谷谷れ志巢谷の

戸あり軒の鶯お姥あまの
霞霞の中お隠しお霞をさる

朝の者のまどおさうさなく
これの鶯絲ぐうの竹の絲ぐう竹

垣根さなるはらふ竹の絲ぐう竹
のこをさる初音

春瓜はらふ暮春の鶯
いさる友友あり友鶯梅梅の

柳鶯まじき鶯お姥の月ふる
曉ふる鶯たふさる葉たふさ

鶯絲ぐうの鶯鶯の涙たふさ
今衣を紐ひき教む鶯鶯笛

狂 錢報でも瓜さるるバ
あうはら経も一ふ八ん次良

梅が枝のそあるのそてんらく
口糸あうりひやううもす

詩 鶯五字對句 同上

魚戲芙蓉水 騎擁軒裳客

鶯啼楊柳風 鶯驚翰墨林

詩 鶯七字對句 詩礎

林間花雜平陽舞 作春啼

谷裏鶯和弄玉蕭 始藏鶯

鶯ノ声ハ弄玉カ蕭ニ似タリ

コソリワウラハスウキヨクモウ

ハシテカラス多ス

春山鶯啼修竹裏

轉黃鸝

仙家犬吠白雲間

送好音

詩 鶯詞

唐 鄭暗

欲轉聲猶欲將飛羽未調巢立

サヘツラントハスレド声ツロハス 高風不

飛ントハスレド羽イニダハ名ハス

借便何處得遷喬

リコレモ巢立ノ鳥ノコトバ風カ手傳フ

詩 鶯詞

鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔

氷飛カスミウスクタ空ニ日景ノトカ

為能歌繫仙籍麻姑乞與女真

衣能歌聲ヲナスニ仙家ノ名籍ニモ

鶯鳥之故事

鶯梭

梭ハ女の機を織ル材ト

のいまるはひかの村と扱て機とみり如

くかきいささき

羌兒笛

鶯声と羌

思の草薙笛と吹

秦か笙

鶯の初音のいさやういさやう

の笙乃ありる

仙韶九成

鶯

仙家の音楽

金衣公子

稱美して詞かり羽の

鳥の囀

百千鳥

といふとく鶯の名とかける書
もわきまどいふと覚るより一頭

昭の読るるうらむらむ鳥或は鳥
の千声みどくしては春るるん

吉守百子あるるるる春のおどた
わしとわしはも我ぞふりゆく

能河上柳梅の目刺 白魚の
百らまり其角

竹の斬りて白魚の目とつらぬ
きけりて賣る勢切り専出る

鵜鳥 形鶯より太黒色声響と調ふ
雄雌の呼雌雨とよふ

駒鳥 頭と左右ふりて走駒の
如く故ふ名づく春夏能辨

雲雀 日の暗る時ハ高く上り
て鳴る日暗ると心と急ぐ

干鱈 たつれりて諸國
に京師大坂等へ春ハ

多く上りきくる故春の季とする
非干てもまて鶉のきま春は東鯉

入用字引集 いろは全一冊

此字引は世俗日く入用の文字
と撰らるるあはれ用ひざる遠
く文字とまづ板字とひくふ
甚とまや久真の早刻り

須為此
字證
字云本
ハ為偽
板也

文化元年甲子臘月發行

浪花 南宮寶寺町心齋橋通り
同 堺 屋新兵衛
同 北久太良町四丁目
同 河内屋新治郎
同 唐物屋四丁目
同 屋茂兵衛
同 京橋二丁目
同 塩 屋弥兵衛

